

夕方前の駅前には相変わらず賑やかだ。普段ならバスケットボール部の部活を終え、星が見え始めることに帰るのだが、昨日の日曜日に試合があったため、今日の部活は中止となっていた。太ももに痛みを感じるが、筋肉痛ではなく、相手と接触した際に痛めたからだ。

糸村星彦（いとむらほしひこ）は、対面の歩道を歩いている高校生を眺めていた。隣の高校だろう。紺色のブレザーが着たかった彼は、今通っている高校の制服が好きではなかった。

「何、ぼーっと見ているんだ？」
「えっ。いや、何でもないけど」

「可愛い女の子でもいたのか？」

「そういう訳じゃないけどさ。俺も制服はブレザーが良かったなって」

星彦の様子を見ていた共原澄明（いはらすみあき）が肩を軽く叩き、顔を近づけてきた。同じ部活仲間、高校では一番の友人だ。スポーツも出来るし、成績も悪くない。星彦よりも顔がよく、いつも彼だけがモテるところは少し嫉妬する。しかし、彼と一緒にいれば何もなくても女子が近づいてくるし、一緒に遊びに行くこともあるので嫉妬と相殺できていた。

「ねえ澄明。私、今日は暇だから、このまま何処かに遊びに行かない？」

二人の後ろに並んで付いて来たのは、澄明が付き合っている大野瀬都奈（おののせつな）と、その友達の伊織（いおり）の二年の女子達だ。瀬都奈は女子バスケットボール部のレギュラーで、可愛い顔立ちとポニーテールの黒髪は男子生徒から人気があった。そんな瀬都奈と澄明ならお似合いだと星彦は思っている。彼らが付き合い始めて二週間。澄明のことだから、すぐに最後までしているのではないかと気になったが、あまり男女関係のプライベートな事まで聞くのは気が引ける——というか、今回は聞きたくないという気持ちの方が大きかった。

瀬都奈は星彦から見ても可愛かった。中学のころからポニーテールが好きだった彼は、出来ればこんな女子と付き合いたいと思っていたのだ。澄明と瀬都奈がセックスをしているシーンを想像すると心が少し痛む。しかし、こうして身近なところに彼女がいて、その声を聞くことが出来るのは彼のおかげである事も認識していた。

「そうだな。どうする星彦、一緒に遊びに行かないか？ ちょうど二人ずつだし」

「澄明が瀬都奈の隣に視線を移すと、無言で話を聞いていた伊織は少し曇った表情を見せた。」

「あの、ごめんなさい。今日はちょっと用事があった」
「そうか。残念だな、折角ダブルデートできると思ったのにさ」
「ダブルデートって、伊織には彼氏がいるんだよ」
「えっ、そうなんだ。じゃあどの道無理か」

「駅前のレンタル屋にDVDを返しに行くの、付き合ってもらって約束をしてただけだから」
その言葉に同調するように、「俺も……いいよ。だから澄明と大野さん、二人で行けば？」と星彦が口を挟んだ。
「さて、どうしようかなあ」

頷いて手を添えながら少しの間考えた澄明は、「やっぱり今日は帰るか」と瀬都奈の誘いを断った。
「そっか。じゃ、仕方ないね。今度の日曜日は空いてる？」
「ああ、大丈夫だけど」
「それなら日曜日に二人で遊ぼうよ。いいでしょ」

「構わないよ」
「うん。じゃあ私、このまま伊織とレンタル屋に寄ってから帰るね」
「じゃあな」
「じゃあね、澄明。糸村さんも」

「あ、うん」
ついでに名前を呼ばれた星彦は、慌てて返事をした。少しの間、瀬都奈たちの後姿を見ていた星彦に、澄明が尋ねた。

「なあ星彦。お前、瀬都奈の事を気に入ってるんだろ？」
「えっ。な、何だよ突然」

「お前が瀬都奈を見つめる目は、俺が今まで付き合ってきた女子を見る目とは全然違うからな」
「そんな事が分かるのか？」
「まあ、同じ男同士だし……っていうか、やっぱりそうなんだ」

「……ま、まあな」
「そうだなあ。瀬都奈はなかなか可愛いけど、実は俺としてはそれほど好きじゃないんだ」
「嘘だろ。あんなに可愛いのにさ」

「なあ。腹が空いてないか？ ちょっとそのファーストフード店に入ろ

うぜ」

「……ああ。いいけどさ」

澄明に促された星彦はファーストフード店に足を踏み入れた。同じく高校生達が何グループかいて、テーブルの足元に大きなカバンを置いて、野球部やサッカー部の連中だろう。そう思いながら別々のレジでハンバーガーセットを購入した二人は、窓際のカウンター式の椅子に座った。目の前がガラス張りになっており、行き交う人々や車が良く見える。

隣同士で座った星彦が、ジュースを口にしながら話を始めた。

「なあ。お前、さっき大野さんの事、それほど好みじゃないって言ったけど、好みじゃないのに付き合ってるのか？」

「俺が好みの女子って大体分かるだろ？」

「……まあ、どちらかというとお姉さんっぽい感じが多いかな。年下よりも同級生、それも大人びた雰囲気の子か」

「分かっているじゃないか。それに比べて瀬都奈はどうだ？」

「それを言うなら、どうして大野さんと付き合ってるんだよ。好みじゃないなら、最初から付き合わなければいいじゃないか」

彼の言い方に、星彦は少し苦立った。まるで瀬都奈が、次の彼女が出来るまでの繋ぎという感じで扱われているような気がしたからだ。ジュースを一気に半分ほど飲み、大きく口を開けてハンバーガーにかぶりつく。その様子を見ていた澄明は、軽くハンバーガーをかじると、窓の外に映る慌しい風景を見ながら口を開いた。

「お前が瀬都奈の事を好きなのは、もつと前から知ってたよ。体育館で練習しているときも、結構彼女に視線を向けてただろ。あの様子を見ていたら、誰でもお前が気に入っている事が分かるよ」

「俺が彼女の事、好きだと分かかってわざと付き合ったのか？ それってすげえ嫌がらせだと思っただけだ」

「そう取られたらそれまでだけどさ。星彦って自分から積極的にアタックしないだろ。俺が彼女と付き合ったら、少しは何かを感じてくれるかなって思っただけ。例えば、俺に取られるのが嫌だから、自分から何かを始めなきゃならないとか」

「……それって、俺のためにわざと付き合ってるって事？」

「俺だって、最初からモテてたわけじゃないんだぜ。一生懸命勉強したし、スポーツもしたし。ま、顔は生まれ持ってたからどうしようもないけど。女にモテる勉強もしたんだ。要は、努力しなければ何時まで経っても前に進まないって事さ！」

最もな事を言われたような気がするが、星彦の気持ちはまだ曇っていた。自分のために動いてくれる友人の優しさを感じると共に、軽い気持ちで付き合ひ、恐らくセックスまでした彼の行動に憤りを覚えるのだ。

「そうかもしれないけど、彼女の気持ちはどうなるんだよ。きっと大野さんはお前の事が好きで付き合っているだろうし」

「そう思うか？」

「違うのか？ さっきも日曜日に遊ぼうって、彼女から言ってきたじゃないか」

「まあ、俺の事が好きかも知れないけど、彼女もまた俺と同じようにモテるからな。俺が特定の彼女という訳じゃないみたいなんだ」

「そ、そう……なんだ」

「ああ。今頃、別の男子に連絡を取っているんじゃない？ 今日暇だから遊ばないかってさ」

「もしかして、彼女って軽い女……なのかな？」

「いや、そういう訳でもないみたい。ほんとに好きな男としかセックスしないらしいから。誰でもホイホイっていうような軽い女子じゃないさ。考え方も結構しっかりしているし、手料理だって作れるんだぜ」

「……よく知っているんだな。やっぱり付き合っているだけの事はあるか」

「お前、俺が瀬都奈とセックスしたと思っっているだろ」

「違うのか？」

「まだしてないんだ。言ったように、軽い女子じゃない。逆に彼女は俺を軽い男だと思っっているみたいで、今は彼女にいろいろと調べられてるって感じさ。今度の日曜日にも、すぐに俺が手を出すかテストするつもりなんじゃないかな」

「……用心深いっていうか、理想の男を捜しているんだな」

「そうかもしれないな。ま、その相手は俺じゃないみたいだけど……っていうか、俺だったら困るよ」

澄明は一通り喋り終わると、ハンバーガーを頬張りジュースを飲み干した。星彦も次第に気持ちは軽やかになってゆく事を感じ、ハンバーガーを頬張った。

「でもさ、もし大野さんが自分からセックスを求めてきたら、どうするつもりだったんだ？」

「さあなあ。星彦、お前ならどうするよ。彼女が求めてきたら」

「そ、そりゃ……断る理由なんてないから」

「俺も同じだよ」
「……だよな」

店を出た二人は、駅までゆっくりと歩き始めた。先ほどよりも人が多くなっており、買い物帰りの主婦やスーツを着たサラリーマンの姿が目立つ。「部活から帰る頃は、こんなに人がいないのに」
「そうだな。今が一番多いんじゃない？俺たちが帰る頃はスーツ姿のおっさんばっかだから」

「だよな。さてと、今日は早く帰ってゆっくりするか。録画していたテレビ番組、貯まってるから」
「なあ星彦。お前、帰っても暇なんだろう？」

「まあな。親も共働きだから帰ってくるの遅いし」

「そっか。俺さ、お前にまだ言ってる事があるんだ」
「何だよ？」

「さっきのモテる話」

「ああ、もつと自分を磨けて事だろ。分かってるよ。俺なりに努力はしているつもりさ」

「モテるためにはさ……」

周囲を見渡した澄明は、星彦の耳元で小さく囁いた。

「セックスが上手くなきゃダメなんだぜ」

その言葉に、しばし沈黙した星彦は少し顔を赤らめながら「そ、そんな事分かってるさ。でも、俺はそんな経験ないから」と、前を見ながら呟いた。

「女がどうすれば感じるのかが分かっていたら、虜にする事だって出来るんだ。今まで付き合ってきた女子がそうだったように」

「何だよ、お前の自慢話なんて聞きたくないって」

「違ってる。そういう意味じゃなくてさ。お前に教えてやるよ」

「……何を？」

「どうすれば女が感じるのかを」

「い、いいよそんなの。澄明に教えられるなんて恥ずかしいし、男同士で面と向かって解説されるのもキモいだろ」

「俺さ、どんな女でも、どうすれば感じるの分かるんだ。性感帯ってやつ？女って、男みたいに単純じゃないんだぜ」

「わ、分かったからさ。そんな事、今この場で話す内容じゃないだろ」

「まあな。とりあえず家にいるんだろ？しばらく外に出るなよ」

「……どうしてさ」

「ずっと内緒にしておくつもりだったけどさ。お前になら話してもいいと思ってる」

「何をさ」

「それは後で教えてやる。兎に角、先に家に帰っててくれよ。じゃあな」
「えっ！す、澄明！？」

意味深な言葉を残した彼は、そのまま近くの百貨店に向かって走っていった。

「な、何だよあいつ。内緒にしておくつもりだったって。俺に秘密があったのか？無理に聞きたいなんて思わないけど」

友人とはいえ、秘密なんて幾らでもあるだろうに。そう思いながら、星彦は駅の改札口をくぐると、少し混み合う電車に乗った。

「ただいま」

玄関の鍵を開け、扉を開いた星彦は静まり返った家に入った。キッチンを覗くとテーブルには母親からのメモが置いてある。今日はいつもより遅くなるから適当な物を買ってきて食べてくれという内容だ。別段気になることなく、冷蔵庫の麦茶を飲んだ彼は、二階にある自分の部屋に入り、そのままベッドに寝転んだ。

「はあ。部活が無くなって楽だな。ま、夏休みに入れば引退だし、もう少しの辛抱か。大学に入ったら、別のもう少し楽なサークルに入ろうか。出来れば女子が多いサークルがいいよな」

そんな事を呟きながらしばらく目を瞑った彼は、服を着替えるためにベッドから起き上がった。すると、ちょうどそのタイミングでインターホンのベルが一階から聞こえた。

「んん？誰だよ、珍しいな。宅配便かな？」

白いカッターシャツに黒のズボンという制服姿のまま一階に下りた星彦は、すでに扉を開けて玄関に立っていた人物を見て言葉を失った。

「ごめんね、鍵が開いてたから入ってきた」

長いポニーテールを揺らし、彼を見つめ返してきたのは、駅前で別れた大野瀬都奈であった。家に帰ったか、他の友達と遊びに行っていると思っていた彼女は、笑顔で話しかけてきた。

「ねえ、ちょっと上がってもいい？」

「あ……ああ。でも、大野さん。どうして俺の家が分かったんだ？

……っていうか、俺に何か用があるの？」

「うん。後で全部話すよ。おじやまします」

動揺を隠し切れない星彦を見てクスツと笑った彼女は、靴を脱ぐとそのまま二階へと上がり始めた。

「な、なあ。ちょっと待ってくれよ。勝手に上がられちゃ困るんだけどさ」

「おじやましますって言ったじゃない。それとも私に見られたくないものでもあるの？」

「そういう訳じゃないけど……」

慌てて彼女の後を追いかけて、階段を上がり始めた星彦の目が釘付けになった。顔を上げると、紺色のスカートに隠されていた下着が丸見えになっていたからだ。彼女に聞こえるかと思うくらいゴクンと息を飲み、足を止める。瀬都奈はスカートの中を覗かれていることを気づいているのかいないのか、何も言わないまま階段を上り切った。

衝撃的な出来事に興奮し、股間を膨らませた星彦が二階に上がると、瀬都奈はすでに彼の部屋に入っていた。

「思ったよりも片付いていたりして。勉強机の上も綺麗だし」

「大野さん。あのさ……ちょっと強引すぎない？ 礼儀ってもんがあるとと思うんだけど」

「え？ 私、失礼な事したかな」

「失礼っていうか……」

「ねえ糸村さん。失礼なのは糸村さんの方じゃない？」

「え？ どうしてさ」

「私、糸村さんのせいで、澄明にふられちゃったんだから」

「はあ？」

「澄明から電話があったの。糸村さんが私の事、好きだから付き合ってたってくれて。それに、元々俺はお前になんか興味なかったんだ……なんて言われて。あまりに突然だったし、腹が立ったから彼に糸村さんの住所を聞いたで答えさせたの」

「あいつ、何て事を。ち、違うんだ。そうじゃなくてさ。澄明が勝手に言うてるだけだから気にしないでくれよ」

「……じゃあ、澄明が私に嘘を付いたって事？」

「うん。嘘っていうか何ていうか……」

どこまでもお節介な奴だと思いつつも、こうして二人きりで会話が出来る事に嬉しさを感じる。しかし、そこまで言わなくともと思うほど、澄明は瀬都奈に暴露したようだ。現に彼女の表情は曇っており、申し訳なさで

いっばいになる。

「澄明って、私の事が嫌いだったのかなあ」

「そ、そんな事無いんじゃない？ 大野さんみたいな可愛い女子が嫌いな筈、無いと思うけど」

「でも、澄明って私みたいな感じよりも、もっと姉さん系の女子が好きだろうし」

「それって誰から聞いたんだよ」

「噂話よ。いつも大人びた女子と付き合ってるから女子なら皆知ってるし」

「な、なるほどなあ」

女子の観察力や噂話って結構当たるんだなあ——なんて思っていると、

彼女の視線に気づいた。

「ねえ糸村さん。糸村さんは私の事、どう思っているの？」

「え……」

「私の事が好きだって……あれも嘘なの？」

「そ、それは……」

「澄明が私と別れるために付いた嘘なんだよね」

「えくと、まあ……そ、そういう事かな」

「ふん、そうなんだ」

これまでとは違う鋭い視線で見つめられると、言葉が失ってしまふ。今、自分の気持ちを偽っているんだ——そう思いながら、逸らした視線を彼女に向けて、瀬都奈の唇が震え出し、我慢出来ずに噴出した。

「へっ？」

「クククツツ！ それじゃ私と付き合えないな。もっと自分の気持ちを前面に出さなきゃ」

「な、何言ってるんだ。どういう事だよ」

「せーさんぶ澄明の仕業、て事！」

「澄明の仕業！？」

「そうだよ。完全に騙されちゃって！ やっぱ俺の演技力が高い証拠かな。アハハツ」

彼女は可愛らしい舌を出して悪戯っぽい表情をした。何が何やら分からない星彦は、瀬都奈の変わりように只驚くばかりであった。先ほどの雰囲気とは明らかに違う軽いノリは、星彦が知っている彼女とは掛け離れている。

まるで——別人のようであった。

「大野……さん？」

「あ。ごめんごめん。あまりの騙されっぷりに大笑いしちゃったよ」

「騙されっぷりって……どういう意味さ」

「ああ、説明するよ。目の前にいるのは瀬都奈に見えるだろ。でも実は……俺、伊原澄明さ」

「……え？」

瀬都奈は自慢げに自分を指差しながらそう答えた。

「まあ、信じられないのは分かるけどさ。憑依って分かるか？ ほら、幽霊なんか人が取り憑く現象。あれと同じだよ。俺、幽体になって瀬都奈に取り憑いているんだ」

「ゆ、幽体になって……マジで大野さんじゃないのか？」

「正確には、この体は瀬都奈のもので、操っているのは俺って事さ。こうして俺が取り憑いている間、瀬都奈の意識は眠っているんだ。だからこの身体は俺が自由に動かせるって訳。納得したか？」

普段の彼女では有り得ない男言葉と澄明を意識させる口調が、徐々に星彦を信じさせた。しかし、何処から見ても大野瀬都奈であり、もしかしたら澄明にフラれた彼女が何か嫌がらせをするために演技しているのでは無いかと言う気持ちも捨て切れなかった。

「ほら、こんなポーズだと瀬都奈の胸が強調されてそえられるだろ？」

セーラー服姿ののも、見慣れてるけどいいもんさ」

両手を頭の後ろに回し、腰を捻りながらセクシーなポーズを取る彼女に、星彦の鼓動が高鳴った。

「ほ、ほんとに……澄明なのか？ その……大野さんが芝居してる訳じゃなくて」

「まだ信じないのか？ さっき話しただろ。お前に内緒にしている事があるって。それがこの能力なんだ。俺さ、何故か分からないけど物心が付いた頃から、精神統一すると身体から幽体が抜け出るようになったんだ。すぐに戻る事も出来るけど、幽体のまま他人の身体に乗り移って、俺の好きないように操れる事が分かってさ。女がどうすれば感じるのかが分かるって言っただろ。あれって、この能力を使って付き合いた始めた彼女の身体を乗っ取って、予め何処か感じるのかを調べておくと意味なんだ。皆、感じるところが少しずつ違うから。前に付き合っていた隣のクラスの明巳は、耳が以上に感じてさ。耳を愛撫しながらセックスすると何度でもイッてたよ。その前の文恵は乳首が気持ちよくて、乳首を愛撫するだけで軽くイッてた。先に性感帯を調べておくと、確実に感じさせる事が出来るから俺の

虜になるって訳さ」

「……す、上げえな。先に性感帯を調べるなんて……って言うか、もしかしてお前、女の快感が分かるのか？」

「当たり前だろ。俺、男女の快感を両方体験出来るんだ。女の快感って男の比じゃないんだぜ。快感だけなら、女に生まれてきたかったと思うくらいだよ」

「そ、そうなんだ」

「信じたか？ 俺が瀬都奈に憑依しているって」

「ああ。信じるよ。でもさ、お前の身体ってどうなってるんだ？」

「百貨店のトイレに置いてきた。眠っている状態になるから、洋式の便座に座らせたままさ」

「大丈夫なのか？」

「多分大丈夫だろ。閉店までに戻れば済む話さ」

「そ、か……誰かにバレなきゃいいけどな」

「ま、意識を失った男子生徒って事で、病院に運ばれるくらいだろうから心配すんなって。それよりも、瀬都奈を乗っ取ったのは今日が初めてなんだ」

瀬都奈の身体を完全に支配する澄明は、彼女の手を使ってセーラー服の襟元を引張り、遠慮なく中を覗き込んだ。

「な、何してんだよ。そんな事勝手にしたら……」

「この匂い、どうして女子ってこんなに良い匂いするんだろうな。全然汗臭くないし」

「……そ、そうなのか？」

「ああ。たまねえよ」

セーラー服の中を覗き込み、彼女の匂いを嗅ぐ姿がたまらなくいやらしかった。自分もあんな事をしてみたい。そう思いながら見ていると、匂いを堪能した澄明は瀬都奈の胸を持ち上げ、その重量感を星彦に見せ付けた。「どうだ？ この胸の大きさ。身体だけなら俺の好みなんだけどな。お前もこの胸、見てみたいだろ？」

「そ、そりゃ見てみたいけど。でも、大野さんからしてみれば、勝手に身体を見られるのって嫌なんじゃないか？」

「だからさ。俺が乗っ取っている間は、瀬都奈の意識は眠っているんだ。俺が何をしようと全然覚えていないんだよ。だから、こうやって……」

瀬都奈の両手がセーラー服の裾を掴み、徐に引き上げた。恥ずかしげもなくニヤリと笑い、自慢げに星彦を見ている。その表情とブラジャーに包

まれた胸を堂々と披露するギャップに、星彦は妙な興奮を覚えた。瀬都奈がするはずのない行動を取っている。いや、澄明によって取らされていると考えると、彼の股間は異様に膨らむのであった。

「た、たまらないよ。俺が目の前にいるのに、大野さんがセーラー服を捲り上げるなんて」

「それだけじゃないぞ。このブラジャーの中も、スカートに隠れた股間も全て思い通りに見ることが出来るんだ。ほらっ！」

調子に乗った澄明が、彼女の手を使ってスカートを捲り上げる。その、何とも言えないセクシーなポーズに、星彦は心からときめいた。片想いの女子が目の前で下着を曝け出し、そのスタイルを自慢している。

「あはん！ 私のお尻、ムチツとしていて可愛いでしょ。糸村さん、私の下着を見て興奮してるんだ。いやらし〜っ」

頭の中で描いていた彼女のイメージを澄明に崩されてしまった事に對しては、若干の腹立たしさを感じた。しかし、彼が瀬都奈の身体を乗っ取る事で、彼女の下着まで見る事が出来るのだ。いや、下着だけではなく、

「そんな風に見せられたらやばいよ。俺、すごく興奮するっ」

「へへ。逆の立場なら、俺だって興奮するさ。ま、今の俺にはチンポが付いてないから、お前みたいにズボンにテントを張ることは出来ないけどな！」

「へ、変なところ見るなよ。マジで大野さんに見られているみたいじゃないか」

「そりゃ、本人の身体には違いないからな。さて、じゃあそろそろ星彦に教えてやるか」

「お、教えてやるって……何を？」

「決まってるだろ。瀬都奈の性感帯だよ。この身体の何処が感じるのかを今から確かめようと思っさ。もちろん、お前にも瀬都奈の身体、触らせてやるぞ！」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。俺の部屋で？」

「駄目か？」

「駄目っていうか、遅いって言っても何時親が帰ってくるか分からないし、俺の部屋じゃやばいよ」

「じゃあ何処がいいんだよ」

「やっぱり、人目に付きにくいところ……かな」

「人目に付きにくいところ？ そんなの、家の中くらいだろ。ちなみに、俺んちは妹が帰ってきてるから駄目だぜ」

「じゃ、じゃあ……どうしよう」

「ここでもいいじゃないか。折角来ているんだからさ。ベッドだってあるし」

瀬都奈は、いつも星彦が寝ているベッドを指差してニヤリと笑った。

「いや……。やっぱりまずいよ。他の場所に行こう」

「それなら何処がいいんだよ」

「だからそれを考えているんじゃないか。えっと……その。あっ、学校に戻らないか？」

「学校？ わざわざ学校に戻るってのかわ？」

「だってさ。俺達が学校に付く頃には皆部活も終わっているだろうし、先生達も帰る頃じゃないか？」

「いちいち電車に乗って戻るのかよ。面倒じゃね？」

「やっぱり駄目か？」

「……ま、今日はお前のために瀬都奈に乗り移って来たから、お前がそうしたいのなら別にいいけどさ」

彼女の口で軽くため息を付いた澄明は、「じゃ、面倒だけど学校に戻るか。あそこなら保健室もあるし、うまく鍵を開けられたらゆっくりと楽しめるし」と笑い、カバンを手を取った。

「悪いな。我仮を聞いてもらって」

「その代わり、俺が瀬都奈の身体で満足するまで付き合ってもらおうからな」

「ま、満足するまでって？」

その言葉に顔を赤くした星彦の股間を瀬都奈の手で軽く叩いた澄明は、「これで私とセックスするんじゃない。糸村さんってかなり鈍いよね！」とお尻を揺らしながら先に部屋を出て行った。そして、糸村家を後にした二人は、夕焼けに染まり始めた空を眺めながら学校戻ったのであった。

「さすが瀬都奈だよ。先生に信頼があるんだな。この姿で保健室に忘れ物をしたから鍵を貸してくれて頼んだら、簡単に貸してくれたよ」

保健室に西日が差し込み、赤く染まっている。瀬都奈の容姿で、まだ職員室に残っていた先生に鍵を借りた澄明は扉の鍵を閉めずに返却すると、二人して保健室に忍び込んだ。窓の外に人影はなく、幾つかの木の枝が揺らめいている。車の走る音が遠くで聞こえるくらいで、昼間の学校のざわめきを感じられない事に妙な寂しさを感じた。

机上にカバンを置き、向かい合うように立った星彦が口を開いた。

「何か静まり返って気持ち悪いな」

「そうか？ 俺は全然平気だけだよ」

「別に怖いと言ってる訳じゃなくて、いつもと違う雰囲気だから。それに、保健室に大野さんと二人きりってのも変な感じなんだ」

「お前が学校でいたいって言うから、わざわざ来たのに。瀬都奈の身体、じっくりと見たいんだろ？」

澄明は瀬都奈の手で胸を指差し、ニヤリと笑った。彼が瀬都奈に取らせる行動の一つ一つに興奮を覚える。セーラー服に包まれた身体は、すでに何人もの男子が抱きしめているのかもしれない。今日、俺はその一人になるかもしれない。彼はベッドに腰掛けた瀬都奈を見ながら思った。

「瀬都奈の性感帯が分かっていたら、もし付き合いが始まった時に有利だろう」

「それはそうだけど、どうやって付き合うか……だよなあ」

「そんなの、お前が告らなきゃ進まないだろ。瀬都奈からは絶対に告らな

いぞ」

「告ったら、必ず断られると思うけど」

「それでも構わないじゃね？」

「どうしてさ？」

「だって……今から私を抱くんだよ。気が済むまでセックスすればいい

じゃない。私、澄明に身体を乗っ取られている間はされるが仮だから」

途中から彼女の口調を真似始めた澄明が手招きした。本人が言っている

ような喋り方は、澄明の気配を隠してしまう。空いているベッドに腰を掛け

顔を上げると、夕焼けを背に、ベッドに腰掛ける彼女が眩しく、また愛

しく思えた。意識が澄明であっても、そう感じるのだ。

「私の性感帯、当ててみて」

「えっ？」

「この身体、好きに触っていいから。耳かもしれないし、項かもしれない

よ。まあ、胸や股間は素直に感じると思うけど」

「い、いいのかわ？ 触っても」

「今更、何を言ってるの？ いいに決まってるじゃない。そのためにここに

にいるんだから。それとも、私が自分で性感帯を見つけてあげようか？」

「あ、いや……それは……」

「触りたいんでしょ、私の身体。触りやすいように制服を脱いであげる。あ、そうだ！ 折角だから……」

瀬都奈がベッドから立ち上がり、カバンを取りに行った。その様子を眺めていた星彦が「何をしてるんだ？」と声を掛けると、「ちょっと目を瞑ってよ」と返事が返ってきた。何かを企んでいるんだと思い、前を向いたまま目を閉じる。するとカバンのファスナーを開く音がし、何かを探している風な感じがした。

「あ、たあ、た！」

少し高いトーンで瀬都奈が独り言を呟いている。

「何があつたんだ？」

「へへ。それは見てからのお楽しみって事でね」

嬉しそうな声が背後から聞こえると、生地が擦れるような音がし始めた。

音だけ聞いているとセーラー服を脱いでいる様に思える。無言でその音を

聞いていた彼は、恐らくいきなり裸で登場するのだと予想した。自分の家

で見た瀬都奈のセクシーな下着姿を思い出す。水色のブラジャーとパン

ティが大人びて、とてもセクシーだった。出来れば澄明の意思ではなく、

瀬都奈自身が星彦に好意を持ってくれ、同じような事をして欲しかった。

そんな贅沢な妄想を抱いた。

二分ほど経つただろうか。生地が擦れる音が消え、裸足で歩いているよ

うな足音が近づいてきた。

「目を開けてもいいか？」

「どうぞ」

目の前で聞こえた彼女の声にゆっくりと目を開けた星彦は、思わず「う

おっ！」と声を上げた。裸になっていると思っていたが、そうではなかつ

た。

「確か今日は体育があつたからな。今の授業って水泳だろ！」

「スクール水着か！」

「ああ。乾ききっていないから、ちょっと水臭いけどな」

彼女の身体に密着する紺色のスクール水着は、先ほどまで着ていたの

セーラー服姿とはまた違つたいやらしさを表現していた。もちろん、女子

生徒の水着姿は何度も見ているが、これほど間近で見る機会はなかった。

ベッドに腰掛けている瀬都奈は、自慢げにニヤリと微笑みながら水着の肩

紐に指を掛けている。大きな胸に細いウエスト、そして張りのある太もも

に、星彦はまたセクシーさを感じた。

「まさか水着姿になるとは思わなかったよ」

「裸よりもそられると思わないか？ それにセーラー服よりも触りやす

いだろ」

「ああ。もうたまんないよ」

「じゃあさ。裸になってこっちへ来いよ」

「何だか澄明だっけ分かってても恥ずかしいな」

「ニシシ。ねえ糸村さん、早く制服を脱いでよ。このスクール水着に触りたくないの？ わざわざ糸村さんのために、使用済みの水着をもう一度着ているのに」

「そ、そういう言い方するなよ。も、もう我慢の限界だっけ」

やはり恥ずかしいのか、瀬都奈に背を向けると急いで制服を脱いでゆく。澄明は瀬都奈の顔でニヤニヤしながらその様子を見ていた。すでに肉棒はちきれんばかりに勃起しており、透明なカウパー液がトランクスの裏生地にはやらしく染み付いていた。

「ほら、後ろに座れよ……っていうか、後ろに座ってよ。後ろから私の性感帯を調べて欲しいの」

彼女の口調を真似る澄明は、ベッドに浅く座り直すと、背後に座るように促した。

「ああ、分かった。うわあ、大野さんがこんなに近くにいてなんて」

「そんなに嬉しい？」

「もちろん」

「だよ。腰に勃起したチンポが当たってるのが分かるもん」

「大野さんの口からチンポなんてエロい言葉を聞くの、一生無いと思うよ」

「当たり前じゃない。普段の私がそんな事を言うはずないでしょ。この容姿と声は大野瀬都奈でも、言動は糸村さんの友人である井原澄明なんだから」

少し固めのベッドに上がり、彼女の背後に回りこんだ星彦は、黒いポニーテールを間近に見つつ、ゆっくりと腰を下ろした。髪から香るリンスの良い匂いと、水着から漂う少し湿り気を帯びた匂い。瀬都奈の項が艶かしく、大人の雰囲気をもし出していた。肩紐の間から見える肌理の細かな背中に吸い付きたくなる。俯くと、勃起した肉棒が紺色のスクール水着に密着し、生地越しに彼女の温もりを感じた。

「な、なあ澄明。これからどうすればいいんだ？」

「どうすればって、好きにすればいいって。この身体がどう感じるのか説明してやるから。今までは自分で調べていただけだから、触られながら調べるのは結構興奮するなあ」

「じゃあ、何処から触ったらいいんだ？」

「だからお前が触りたいところを触ればいいんだって！」

「緊張するなあ。大野さんの身体に触るなんて」

「そんな事言ったら、何時まで経っても前に進まないだろ」

「分かってるけどさ。じゃ、じゃあ……」

澄明が自分の口調で話している分、少しは気持ちが悪くなったが、それでも緊張した趣で右手を彼女の肩に添えると、左手を脇の間から差し伸べ、滑らかな腹部に置いた。初めて触った女子用スクール水着は、男子用のそれとは少し違っ、た生地のような気がした。

「大野さんの身体に触れるなんて有り得ないよ」

「これが現実なんだ。どうだ？ 瀬都奈の身体に触った感想は」

「そりゃ感激しまくりだよ。このスクール水着越しに触るお腹がすごく滑らかで気持ちいいし」

「じゃあさ、項から首筋を舐めてくれよ」

「いいの？」

「ここが気持ちいい女子も結構いるんだ」

「わ、分かった。じゃあ……」

鼻息を荒くする星彦は、白くて滑らかな項に舌を這わせた。汗を掻いていたのか、ほんの少しの塩気を感じる。一瞬、瀬都奈の身体を震わせた澄明は、無言で彼女の感覚を確かめていた。硬くした舌先で上から下へと愛撫する。時折髪の毛が纏わり付いたが、気にせずに舐め続けた。

「どうだ。気持ちいいか？」

「……まあまあって感じかな。それほど敏感には思わない」

「そうなんだ。じゃあ大野さんって項を舐めても気持ちよくないって事か」

「ああ。下半身がキュンとするような感じにはならないな」

「へえ、なるほど。じ、じゃあ今度は……」

愛撫する事で緊張が和らいだ彼は、肩に添えていた右手も彼女の脇を滑らせ、大きな乳房を両手で優しく掴んだ。

「お、胸にきたか。どうだ？ 柔らかいだろう」

「まるでマシヌマロみたいだ。これが女子の……大野さんの胸なんだ」

「ああ、大野瀬都奈本人の胸さ。ふうっ！」

背後から不意に耳を甘噛みされた瀬都奈の口から、甘い吐息が漏れた。「耳たぶはまあまあ気持ちいいかな。お前の鼻息が耳に掛かってくすぐったいよ」

「すげえ興奮するよ。大野さんって気持ちがいいとそんな声を出すんだ」

な」

「そうさ。この声って自然に出るんだ。お前だって射精する時に声が出そうになるだろ」

「ああ、確かに」

「あれと同じだよ。……んっ。はぁ、あっ」

水着越しに胸を揉みながら、耳たぶを舐めるように愛撫する。彼女の切ない声が耳に届くたび、星彦は激しく鼓動を高ぶらせた。

「たまないよ。まるで本物の大野さんみたいだ」

「へへ、まあな。身体が感じるままに声を出しているだけなんだけどさ。耳は攻めてもいいみたいだな。全然嫌な感じじゃない」

「そっか。胸はどうなんだ？」

「やっぱり水着越しだとイマイチ良く分からないな」

「それなら……ここは？」

興奮する星彦の右手がすつと下半身へと下りていった。

「お前、てストレートだな。ま、経験が無いからそんなもんだと思うけどさ」

「女子の股間を触ってるなんて……俺、一生無いと思ってたよ」

「そりゃ言いすぎだろ。まあ、スクール水着を来た女子の股間を触るのは無いかも知れないけどさ。そういう意味では貴重な体験って事で」

股間に手を添えられた瀬都奈は微笑んでいるが、眉が若干歪んでいた。撫でるように触る指が、滑らかに盛り上がる土手の中央へ差し掛かると、身体をピクリと反応させる。

「こうやって弄られたら気持ちいいのか？」

「クリトリスを撫でられた時はな。水着越しじゃ分からないだろうけど、瀬都奈の股間、かなり濡れてるよ。下半身が熱いんだ」

「それって俺が感じさせたって事か」

「ああ。俺自身がちょっと期待している事もあるけどさ。意識と身体はリンクしてるから、俺が興奮すれば瀬都奈の身体も興奮するんだ。チンポと同じさ」

「そう言われると、澄明と大野さんが一つになってるみたいで、妙にエロいな」

「瀬都奈の五感全部俺のものだから。まあ、分からないのは瀬都奈の意識っていうか、記憶くらいかな。さすがに記憶を司るところまでを支配することは出来ないから」

「そうなんだ。でも、記憶まで分かったらすごいよな」

「それが出来れば、完全に瀬都奈に成りすませるって訳さ。友達や先生、家族だって気づかないだろうな」

「へえ」

「ま、そんな事より、今度は直接胸を触ってみろよ」

「えっ、直接？」

「そうさ。生乳ってやつだよ」

瀬都奈がスクール水着の肩紐に指を掛け、ゆっくりと引き下ろし始めた。伸縮性のある肩紐が肩から外れ、そのまま腕を滑り下りてゆく。紺色の生地が覆われていた背中が現れ、滑らかな肌が腰あたりまで披露された。

「いいぜ、揉んでも」

彼女の肩越しに覗き込むと、綺麗な血型の乳房の上に、ピンク色の勃起した乳首がその存在を主張していた。背後で鼻息を荒くする星彦に、両手で胸を持ち上げた瀬都奈が「ほら、こんなに乳首が勃ってるぞ。瀬都奈の身体が興奮している証拠だ」と見せ付けた。彼女の掌で踊る乳房があまりにも柔らかそうで、星彦はたまらず自らの手で鷲掴みした。

「うっ！ そんなに強く掴んだら痛いだろう」

「あっ、ごめん。だってそんな風に見せられたらたまらないよ」

「衝動的な奴だな。まあいいや。この胸、好きな様に揉めよ」

「や、柔らかい。水着越しに触るのは全然違うんだ」

「まあな。……はぁ、はぁ、んっ」

「感じるのか？」

「ああ。やっぱり直接接触されると……あっ」

瀬都奈は右手を口に当て、左手を星彦の胸を揉んでいる手に添えた。その仕草に、また興奮した彼は勃起した乳首を摘んで引張った。

「あふ……ん」

鼻に掛かった切ない喘ぎ声がたまらない。コリコリとした乳首を指の腹で転がし、少し強めに摘んでみる。すると、彼女は上半身をピクリと震わせ、両足を宙に浮かせた。

「ち、乳首っ。すげえよ。他の女子と比べてもかなり感度が……んんっ！」

「そうなんだ。大野さんって乳首が弱いんだな」

「はぁ、はぁ、んっ、んんっ」

言葉を発しなくなった瀬都奈を背後から見つめる彼は、両方の乳首を執拗に弄った。可愛らしく喘ぐ彼女だけを見れば、澄明の存在など全く分からない。掌に伝わる乳房の温かさと硬く勃起した乳首の感触。彼は瀬都奈

の背中に上半身を密着させ、その華奢な身体が発する火照りを実感した。時折身体をくねらせ、その快感を表現している。そんな彼女を見て、更に興奮した彼は腹部まで下ろされた水着の中に手を忍ばせた。熱気の籠る水着の中を這い下りる指先に滑り気を感じる。そして自然と肉の割れ目に指が吸い込まれると、「あああッ！」と瀬都奈の口から大きな喘ぎ声が漏れた。中指の先端にしこりを感じる。それを弄ると、彼女の全身は大きく震えた。

「ああッ。あッ、あッ……う」

「ここ、クリトリスか？」

「んっ、んんっ……はあ、はあ、あッ、あんっ」

「その喘ぎ声、たまらないよ。それに水着の中が洪水みたいにグチョグチョになってる。これ、全部俺がさせたんだよな」

「うっ……はあ。ああ……そ、そうさ。お前が……あッ、はあ、はあ、お前の愛撫でそうだったんだよ。クリトリスもすげえ感じる。瀬都奈の身体、急所がかなり敏感なんだ」

「指が……中に入ってく」

「んはあ。そこ、膣口だよ。お前のチンポを入れる場所だから……あッ、十分に濡れてないと……んんんっ」

瀬都奈の左手で星彦の頭を引き寄せた澄明は、彼女の身体から沸き起る女性の快感に酔いしれた。最初はそれ程思わなかったが、今まで乗り移ってきた女子達の中でもトップクラスの敏感さだ。自分で弄るのではなく、星彦に弄られているという違いも大きいのではないかと澄明は思った。彼が指を動かすと、クチュクチュといやらしい水音が股間を包み込む生地の中から聞こえる。その音が興奮を倍増させ、指の動きを速めさせた。

「あふッ！ あッ、ああッ。クリトリスと膣の中が掻き回されてっ」

「相当気持ちよさそうだな」

「そのまま動かして……あッ、あッ、んんっ、はあ、はあ、はあ、イ、イキそうだっ」

「嘘、マジで？」

「んんんっ、んんっ、あッ、ああッ、もっ」と激しくっ」

その言葉に、星彦は力いっぱい指を動かした。水着の盛り上がりは上下に激しく動き、彼女の身体をオーガズムへと導いてゆく。空いた手で乳首を握り、耳たぶに吸い付きながら瀬都奈の喘ぎ声を聞く。すると、程なくして彼女が絶頂を迎えた。

「あッ、あッ、イクッ！ 瀬都奈の身体でっ……イ、イクウッ！」

ビクビクと身体を震わせ、ベッドから滑り落ちそうになる彼女を後ろから抱きしめた星彦は、右手に瀬都奈の逆る愛液を感じ満足した。

「はあ、はあ、はあ、ああッ」

「そんなに気持ち良かったのか？」

「はあ、はあ、ふう。やっぱり瀬都奈の身体が感じるといよりは、他人のお前に弄られているから余計に気持ちいいんだろう……。はあッ」

何度も大きく深呼吸した瀬都奈は、しばらく快感の余韻に浸っていた。

そんな彼女を優しく抱きしめていた星彦は、無言でゆっくりと腰を動かし、スクール水着に肉棒を擦りつけ、自分も気持ちよくなりたいたいと強請った。

こうしているだけでもイッてしまっそうだ。そう思っていると、瀬都奈がベッドから腰を上げた。

「分かってるって。じゃ、次は星彦の番だな。仰向けに寝転べよ」

「えッ。仰向けに寝転ぶのか？」

「今度は俺が瀬都奈の身体を使って楽しませてやるよ。それとも、自分からするほうがいいか？」

「あ……いや。してもらえんなら」

「相変わらず積極性が無いよなあ。まあいいや。じゃあ俺が積極的な瀬都奈を演じてやるよ」

そう言うと、仰向けに寝転んだ彼の上に跨った。

ほんの少しの間、互いに顔を見合った後、瀬都奈は星彦の反り返った肉棒を見てニヤリと笑った。

「糸村さんのチンポ、私の中に入りたがってるね」

「あ、ああ。そうだな」

「先にこの手でしごいてあげる。大野瀬都奈の手でね！」

彼に跨る彼女の足は恥ずかしさの欠片も無く大胆に開かれており、水着が横にずらされた股間には、薄い陰毛から皮の被ったクリトリス、そしてサーモンピンクの陰唇が惜しげもなく披露されていた。星彦は少し頭を上げながら、初めて見る神秘的で艶かしく、ある意味グロテスクな女性器を目の前に、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「私のマンコばかり見て、エッチだよ。後で好きなだけ入れさせてあげるからちょっと待ってて」

すでに何人もの女性器を堪能し、見慣れている澄明は、瀬都奈の手で彼の肉棒を握り締めた。舌を出し、悪戯な表情をする彼女を見て、星彦は思わず彼女の手首を掴んだ。

「うっ……はあ」

「硬いね。この長さなら、もしかしたら子宮口まで届くかも」
「子宮口？」

「そうだよ。赤ちゃんが出てくるところ。知ってるでしょ？」

「そりゃ……知ってるけど、子宮口なんて言葉が出てくるなんて思わなかったよ」

「女子なら誰でも意識してるんだから。生でセックスした時に、直接子宮へ精子を出された子もいるんだよ」

「それって、子宮の中にチンポが入って事か？」

「チンポが長い場合はね。亀頭が子宮口をこじ開けて、メリツと入ってくるの。そのまま射精されるって事」

「大野さんはされた事があるのか？」

「さあ。本人に聞いてみないと分からないよ。だって私、偽りの瀬都奈だから」

「そ、そっか。でもそんな事を良く知ってるよな」

「チンポを子宮の中に入れた事があるからね。あの、細い子宮口の中に減り込む感じがたまらないの」

「何か、大野さんの口から言われるとすごく違和感を感じるよな。まるで大野さんがチンポを持って、てるみたいな言い方だ」

「確かにね。ま、それよりも手コキを続けようよ」

肉棒を握り締めていた細くて滑らかな手がゆっくりと上下に動き始める。肉茎をしごきつつ、空いている手で玉を優しく弄られた星彦は、「うふう」と間の抜けた吐息を漏らした。

「大好きな大野瀬都奈に手コキされて気持ちいいんだ」

「当たり前じゃないか。それに、生まれて初めてされるんだからさ」
「じゃあ、もっとエッチにしごいてあげるよ」

ニヤリと笑った彼女は、顔を肉棒に近づけると、泡だった唾液を亀頭へ垂らした。粘り気のある唾液は亀頭から肉茎へと伝え落ちてゆく。そして、細くて白い指と肉茎の隙間へと入り込んでいった。同じ事を三度繰り返し替えた瀬都奈が、また肉棒をしごき始める。唾液が潤滑剤となって、彼女の手が滑らかに動いた。

「うっ、はあ、はあ」

「どう？ 私の唾液でネチョネチョ言ってるよ。糸村さんのチンポ、いやらしいよね」

「はあ、はあ、たまないよ。大野さんがこんなにいやらしい事をしてくれるなんて」

「うあっ！ ううううっ、うっ」

「わおっ！ いきなりだな。出るなら出るって言うてくれたらいいのに」

「はあ、はあ、はあ。だ、だって……手コキされるのって気持ちよすぎてる」

「激しいな。まるで一週間くらい抜いてなかったみたいだぞ」

円弧を描きながら放たれた精液は、彼の胸元から敷布団の上へと無数に飛び散っていた。何度かしごき、肉棒の中から精液を出し切った瀬都奈が汚れた手を敷布団に擦りつけている。彼女の手から開放され、勢いを失った肉棒であったが、しばらくすると何事も無かったかのように太く、硬く復活した。

「元気なチンポだな。じゃあ……今度は私のマンコで気持ちよくしてあげてね。初めてのセックス、どんな感じだと思っ？」

「そりゃ、気持ちいいと思っけど。ドキドキするよ」

「私もドキドキする。だって、女子の身体を乗っ取ったままセックスするの、初めてだから」

「そっか。いつも性感帯を調べるだけで、セックスするときは自分の身体に戻るもんな」

「うん。もちろん、女子の身体を使ってのオナニーは百回以上楽しんでるけどね！ バイブじゃなくて、生のチンポを入れるのは初めてって事」

「妙にリアルな話だな」

「でしょ。ほら、大野瀬都奈のマンコがこんなに濡れてるよ。早く糸村さんのチンポに入ってきて欲しいと強請ってるみたい」

わざと瀬都奈本人ではない雰囲気言葉をかもし出す澄明は、彼女の指を使って陰唇を広げて見せた。トロリと粘り気のある愛液が滴り、お尻へと伝っている。

「女子ってそんなになるんだ」

「人によるけど。この身体は多いほうじゃないかな。あまり出ない女子もいたよ。そんな時は予めローションを用意しておいて、塗り込むの」

「へ、へえ」

経験豊富な彼は、瀬都奈の声でこれまでの体験を軽く話すと、肉棒に照

「その通り。だから幾ら中出ししても大丈夫って訳さ。生でセックス出来て気持ちよかったら。俺も瀬都奈の身体で本当のセックスが出来て、最高に気持ちよかったんだ」

「そっか。でも、よくそんな薬を手に入れたらな」

「そんなの、簡単に手に入るって。女子の姿なら何の抵抗もないし。ああ、金は俺が出したんだけどな」

「へえ。まあ、妊娠しない事が分かって良かったよ。後、お前の身体、百貨店のトイレに置きっぱなしなんだろ。そろそろやばい時間じゃないのか？」

「そうだな。見つかって病院に送られているかも……。ま、別に気にする事は無いって」

スクール水着を脱ぎ、瀬都奈の裸体を披露した澄明は、「この身体がどうすれば感じるのか、良く分かったら。んふっ！ 私と付き合ったら、今日みたいに激しくセックスしてね！」とウインクし、頭の後ろに両手を回してセクシーなポーズを取った。

「ああ……そうだな。でも、やっぱり俺、大野さんには告らないよ」

「どうしてなの……って、聞くまでもないか。もう私の身体を堪能しちゃったんだから。未練なんて全然無いって感じ？」

「まあ、二人で映画を見たり買い物に行ったりするのは楽しいかも知れないけど、やっぱりさ……」

「糸村さんって、そんな男だったんだ。女子の敵だね」

「そう言うなよ」

「ま、最初だから仕方ないか。私は告られるの、待ってただけどなあ。ほんとは気になってたんだよ。糸村さんの事」

「そんな冗談を言うな」

「へへ、少しは告る気になるかと思ってさ」

二人は制服を着ると、誰もいない校舎を抜け出た。身体が妙にだるいし、肉棒がトランク스에擦れて少し痛い。それは瀬都奈の身体も同じであった。

「何かマンコがヒリヒリするよ。お前、激しすぎなんだよな」

「大野さんが意識を取り戻したら、どう思うだろう？」

「さあな。いつの間にか夜になってるし、股間がヒリヒリして痛いし……。もしかしたら自分の身体に何か良からぬ事があったんじゃないかって思うかもな。でも、誰も分からないから大丈夫さ。とりあえずこの身体を家に返さないといけないから、駅で別れるか」

「ああ。大野さんとセックスできるなんて夢のようだった。サンキュー」

な」

「俺としては、お前が瀬都奈に告ってくれた方が良かったんだけど」

「……正直、やっぱり自信がないから」

「もつと積極的になれよ。お前だってセックスすれば十分に女子を堪能させられるんだからさ」

「……それが分かったのは良かったよ。ちょっと自信がついたから」

「ま、次に付き合いたい女子が現れたときは頑張れよ」

「ああ……」

こうして二人は駅前まで歩くと、別の方向へ歩いていった。これまでの人生で最良の日を過ごした星彦は、瀬都奈とのセックスを思い出しながら股間を膨らませた。

「大野さんとセックスしたんだ。ああ……一生の思い出になるな。あんな事、澄明がいなければ絶対に出来なかったからな。そう思いながら電車に乗り、帰っているであろう両親が待つ家に戻ったのであった」。

そして次の日の放課後。星彦は澄明に呼び出され、校舎の屋上へ上がった。

「あっ……。あれっ、伊神……さん？」

「待ってたぜ星彦。今度は明巳の身体でセックスしようぜ」

「す、澄明……なのかな？」

「ああ。明巳が俺と付き合ってたときに、どんな風感じていたのか確かめたくてさ。適当な男子でも良かったんだけど、折角ならお前がいいかなって。性感帯は分かっているから、俺の指示通りに愛撫してくれればいいし。それに、お前もセックスの経験を積めるから一石二鳥だろう」

「そんな勝手な事……」

「嫌なのかな？」

「嫌とかじゃないけどさ」

「へえ。糸村って私みたいな女子より、瀬都奈の方が好みなんだ。何なら、また澄明に頼んで、あの娘の身体でセックスさせてあげてもいいんだけどなあ。今度はセーラー服のままがいいかな？ それとも誰かにユニフォームでも借りようかな。新体操部やソフトボール部のユニフォームもいいかもね」

「……お前って最強パートナーだな」

「でしょ！ じゃあ早速この身体で楽しもうよ」

友達想いのアイツは最強パートナー

明己がスカートを持ち、パンティを曝け出している。星彦に断る理由なんて無かった。こうして彼は、澄明が乗り移る二人目の女性とセックスを楽しんだ。このあまりにも美味しい関係からは逃れられないと思いつながら。

友達想いのアイツは最強パートナー おわり